



主從心得草三編

下

9
1540
6



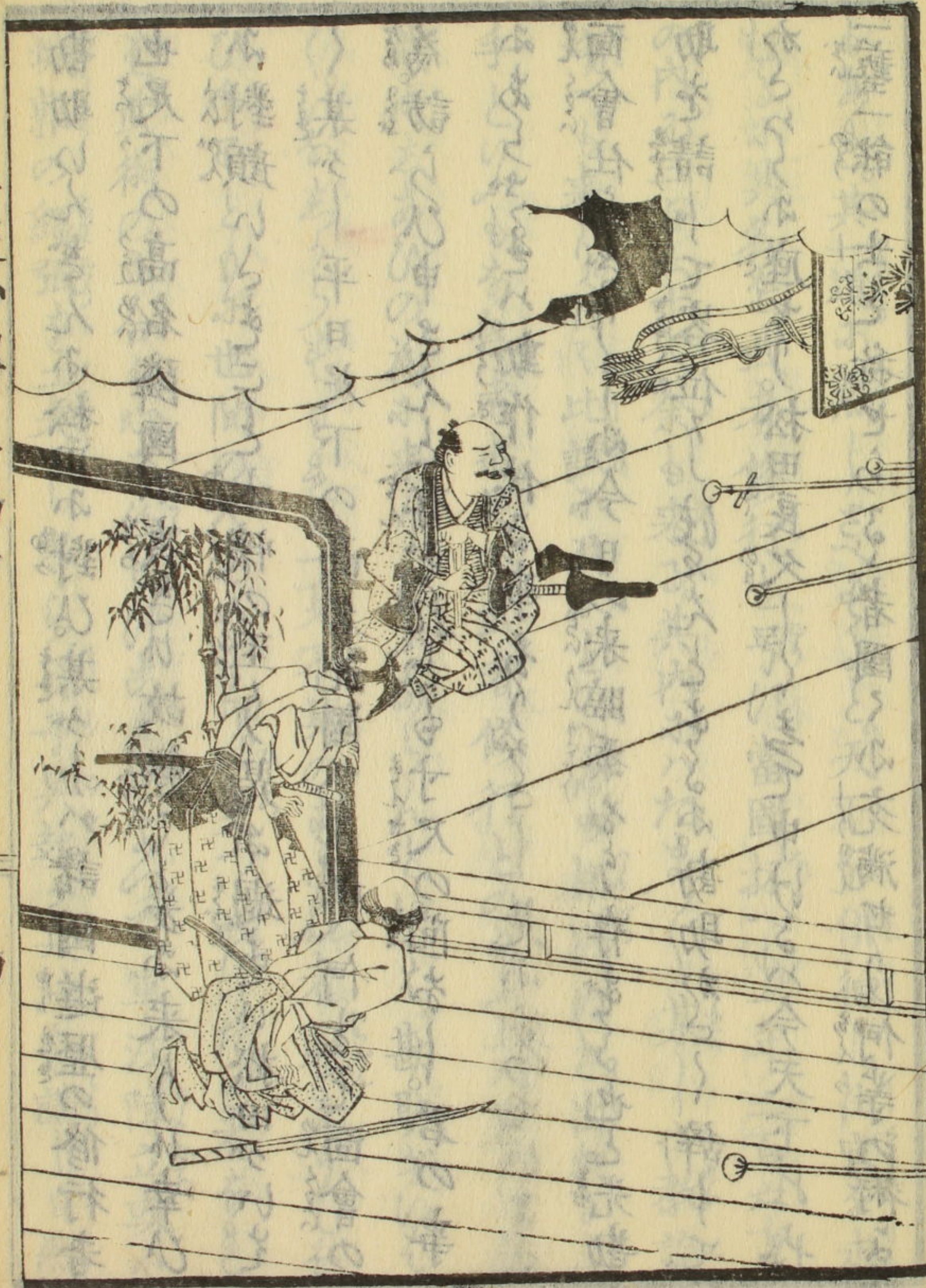
門口仁9
1540
6

主従心得草三編下目錄

山本勘助松田七郎左衛門と軍法論談の事	二丁
兵法の書始めて我朝へ渡る来由の事	五丁
大公望孔明の始めより軍師とある事	九丁
山本勘助松田と劔術試合の事	十四丁
山本勘助比條氏康江御目見の事	十七丁
山本勘助義元江御目見の事	廿一丁
列禦寇國君よりたもるる米穀をぬぐと事	廿四丁
平原君趙勝天下の賢士を集むる事	廿七丁
平原君愛妾を切て天下の賢士用ゆる事	卅八丁

越軍記初編七ふいそく本朝大永天文の間。劍戟鞘を出
るの時。仗勇の士。劍を佩。鎧を荷。諸國を往来。用ひ
り。もん事を専らと。爰。山本勘助。三州牛窪の産
みて。武田晴信公。いまだ。勝千代といひ。一時。せ。ろ。ふ。主従の
内約を。あ。さ。め。天文三年の春。より。心。深。く。思。慮。あり。あ
兵法修行。了。事。の。せ。關。八。州。を。徘徊。東。へ。奥。州。の。果。ま
でも。隈。あ。く。あ。る。き。或。ハ。半。年。又。と。三。ヶ。月。所。く。り。逗留
一。兵。術。を。試。し。軍。法。を。討。論。其。國。の。弓。矢。の。法。諸。士
の。剛。柔。を。見。廻。り。ける。その。比。英。雄。の。大。名。天。下。ハ。滿。武。藝
者。と。呼。ぶ。者。家。々。ハ。備。と。是。り。中。ハ。も。相。州。小。田。原。北。條

相摸守平の氏康ハ伊豆相摸を取。勢ハ近國。了。と。ふ。ろ。き。け
を。か。の。家。の。弓。箭。の。法。を。試。む。べ。し。と。小。田。原。の。城。下。よ
至。り。ぬ。其。頃。北。條。家。武。術。の。師。小。松。田。七。郎。左。衛。門。と。り。ふ
者。何。り。渠。ハ。十。文。字。の。鎗。を。鍛。鍊。隣。國。ハ。あ。ら。う。ぶ。者
あ。し。と。聞。え。し。小。より。あ。さ。が。方。ハ。あ。り。む。き。其。人。物。を
見。て。此。家。ハ。逗留。せ。んと。松。田。ガ。家。ハ。案。内。し。ら。む。折
節。松。田。ハ。誓。古。所。り。出。門。弟。共。ハ。鎗。術。の。教。授。を。し。て
居。たり。し。ガ。勘。助。來。ると。聞。て。人。を。出。し。請。し。入。其。容。負
を。見。る。小。至。り。て。小。男。あ。し。て。其。上。ハ。片。目。趁。也。座。中。ハ
あり。合。若。者。と。も。是。を。見。て。目。と。目。と。見。合。せ。笑。ひ。ける。



山本勘助松
田七郎左衛門
と軍法論
後の不



勘助いんぎん小松田小對ひ。某かーハ諸國遊歴の修行者也。足下の高名隣國小裏きハ故態く爰小来りハ幸ひ小對顔いハこと本懐の至リ是ハ過むハ松田がいも某かー平日足下の高名此國へも聞へ何とぞ面會の爲訪らひ申さんと存むれども寸尺の間あハ君の事小あつたさハ動作仕る事ありがごとし。是ハあつていまご面會仕らざりハ今日の來臨泰あり存むる也。先勘助を請卜て客位リハ法々んとまゐる小。勘助わこく辞して。わさつ小座せり。松田良久ハ志て申けるハ。今天下ハ内一藝一能の士と称せらるる者國々ハ充滿せり。何等の術も

もあも。其一道ハ熟ハさへもると。天下を徘徊。仕官を求むる小其名を。武者修行と号ハ當國杯へも。一年三百六十日の内ハ三百六十人余も來る。其内ハたまく某ハ教諭場へも來り。時々比試ハ及ぶといへども格別ぬき出たる上手とりハもあき者也。足下武者修行とのあハ上ハ。某ハと武術志あハの爲小来りハあらんといハ。勘助がいも。いハあつたさハ。一身不具のまこれ者。眼をうしハ。ハ手足とりハ世間の人とあつり。一隻づあけたる者あも。武術の立合も心ハ任せハあもハ。軍法陣立或ハ城郭の繩張を工夫。専ら孫子吳起ハ兵法を講卜自然

軍法も長とたる人あつた。其人と討論し身の及はざる所を修行仕らん為あり。夫故も國々も於て高名の人さへあまびいんぎんも訪ひ高論をもちけむる者也。此國も於て足下の高名隣國も流布せり是もよ例て一番も貴兄の元も泰りたりと。あへて武術もとりあもむべき也。松田がいとく然らば軍法あも張の事を宗として修行し給ふあらば。更も某が預る所もあらむ。そのくもき事ハ存せむといへども。凡そ軍法の起り人王九代開化天皇も御宇漢土より履陶といふ人初めて太公望が六韜孫子が十三篇を渡せり。其時ハ前漢の景帝の代もあつたりと

いふ。あつるも本朝文字の学いまも行あるをむ。うの兵書ありといへども。こもを讀事あつた。其まも朝廷も傳をりし所。人皇十六代應神天皇十六年も百濟國より王仁といふ者来り漢土の學始めて我邦も行つた。天子もこもを学ませむひ文字の意味是より解得して其後かの履陶が奉りし所の兵書もよむべきなりあり應神天皇えいらんましくして熟く思召けるハ此書ハ兵書をもちゆるの法也。いし是を世上も押ひあむる時ハ諸人兵者を用ゆるの法をあらむ。竅逆を起す者多かるべしと思召て。忽ちやき失ひぬひける。其後人皇六十代醍醐天

皇の御宇ありて兵書の國家を治むるの道ありしや
 りの事を聞し召せ。延長元年五月大江の維時とりし人
 を入唐せしめ。兵書を求めてかへしめむ。是より兵
 書まこと朝廷に傳せり。うごも用ゆる人あり。合戦乃
 道ハ漢土の兵法をうごむして我國ハ唯自然と戦ふあは
 て兵を用ひしり。もてかあまよりときき神功后宮三韓を
 征伐しむし時。いまだ漢土の兵法をまらしめさむといへど
 も。三韓を切あめ帰朝ましりたり。是自業自得の兵法
 ふして學びし。道ふあらむ。叔その後天慶の頃將門純
 友をせめらしむし時。いづもこの兵法ふよるといふ事を聞し

む。皆敵をやかり乱をまづめたり。りの維時卿漢土より法
 法へ歸りし。兵法。初めて武家に用ゆるゆりありし。八人皇
 七十二代白川院の御宇。八幡太郎義家公朝廷へ奏聞を遂
 むし。の兵法の書朝廷に秘し。あきむふとも。何の益り候
 らん。天下を治め主上を太平の御代に置奉る事ハ武家に
 あり。願はくも左大臣大江維時傳來の兵書を武家へつ
 たへらま下さるべありが。奉存と願ひ申さむけし
 也。早速 勅許ましりて。かの維時卿より六代目。大江
 の匡房卿に 勅して。太公望孫子呉子等の兵書の大事を
 石清水八幡宮の御宝前において。悉く傳授せしむ。是より

て八幡太郎の宝物とあまり。義家公思慮一むふ異國
と我朝とい土地人氣ひと一からむ。人氣小應せざるこ
とハ。兵書といへども用ひごとき所あり。異國の道を以て我
國の人氣小叶ふやうふもべ一と兵法の書を取捨一ぬき
直して訓閱集とり小兵書三卷を作り。虎の巻と名付子孫
小傳へらむたり。其後源義經虎の巻を熟学して兵法の
大事を極め。平家を一の谷又ハ八島小やぶりあふ是皆虎
の巻の徳小よきりとりけむる。其後楠正成新田義貞
の如き豪傑あらび起るといへども。唯何の兵法いづも
流義を以て敵をや破り一とりのことを聞む。唯戰場

數をふんで。虚く実々の妙義を知りむへり。然らざるを
実の兵法といひひごとし。足下ハ三州牛窪小生も人數五十
人とも持む小人とも兼らば。破るる城一ツを持むひた
る事あり。一邑一村の主もあらば。いとづら小壘のうへ小
人形をあらべ。土をつう存て。城郭の形ちを作り。かくのご
とくせむ。敵をやぶる小便りあり。かくの如くせむ城の
かまへ堅固ありと十分一の小形をつくり。胸箒用をやる
るハ倍小知の水練と申す者小て。役小立ぬ事也。太平
の時たつこの上めて高論をりし時ハ。何事を申すともよけ
まらむ。まことの戦場にのむ。あむたいことをあらむ。矢炮

を飛ませ時ふいたりてん。心膽取みたる。号令行あらます。
 采配も行届らば。内も在て利害を存ある。とら甚ぶ相違
 する者也。論のこ高くして業もかまていさつたり。埒明
 む。日頃の論の虚論ふして。何の益なき事也。然らば軍法の
 法則ありて法則あり。弁論の只舌の先の強者ぐひひ勝と也。こ
 傍若無人の罵ありれば。勘助の笑をふくみ。足下の高
 名の師範あり。凡そ一藝の秀たる者。万端もかきあき
 者也。是ゆつて高論もあらんうと。おひの所。案の外を
 る論。判。世上無智の信人ふあは。未だ古里をのがき
 かも。浅まらき論あり。我らありあまざるめあつとといへ

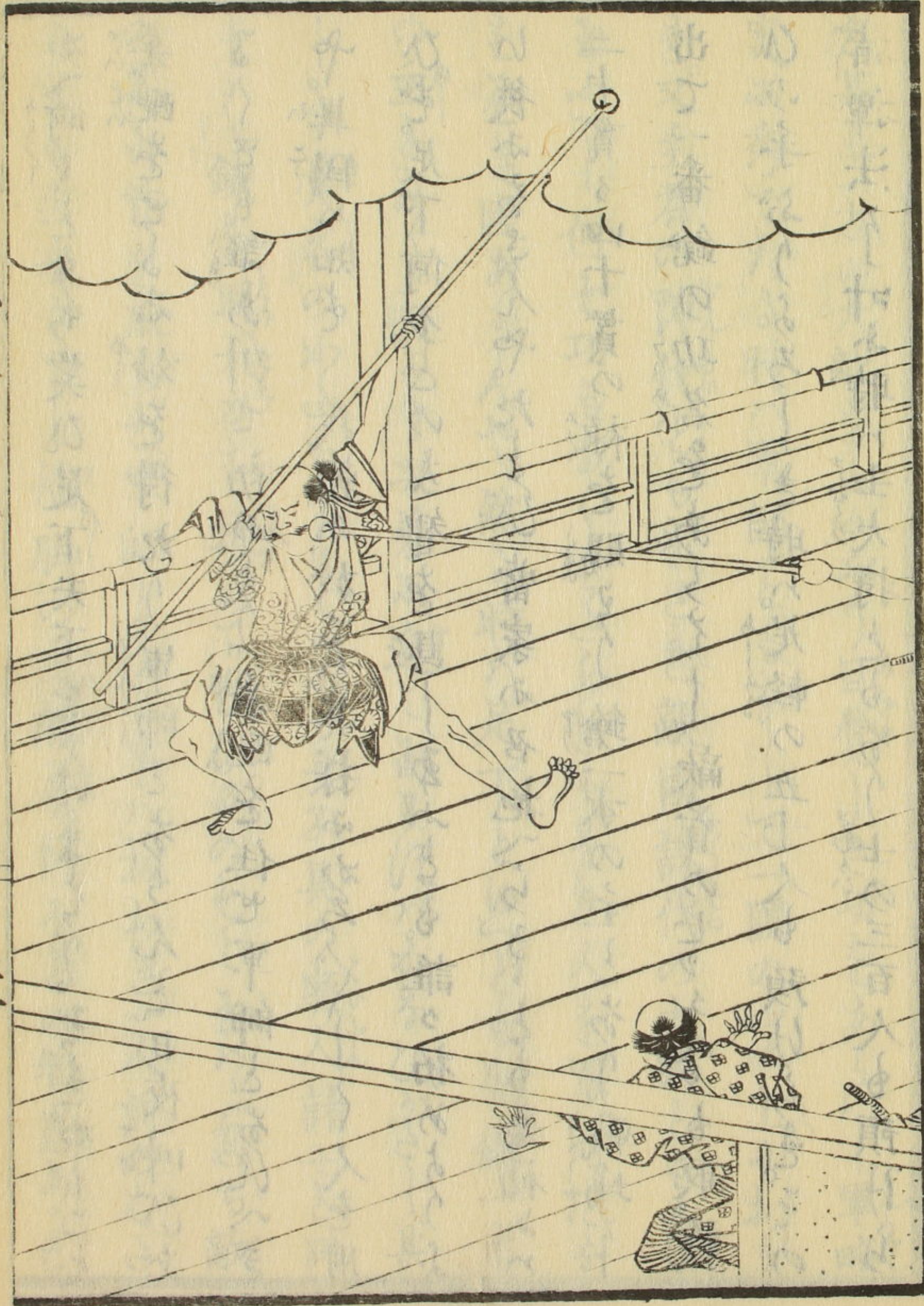
ども。少くも口をひらくべし。夫智の上下中下の三ツあ
 り。上智といふは天性の聖人のごとき者是あり。中智を
 りふと學んで自然の妙ふいたる。下智といふは區々たる世
 の流俗ふして。足下のごとき人是あり。下智ふして上智
 の人の心を去る事あり。上智の学をばして自然の妙處の
 いなり。工夫をうらむして其よりきふ當る。上古の太公望
 の類是あり。紂の乱をさけて。東海の濱に居り其後渭
 水に釣をたも。八十歳もあまると。逆身も従ふ物。こ
 本の釣竿の。奴僕の一人もつらふ事をき水辺の釣。石
 り。然るなり。文王の夢あり。忽ち軍師も拜せし。石

を出て殷の紂王をやるは凡時ハ車ハ座ハ團扇をく
 野の戦ひふ七十五万の敵をこゝろ一殺し。周家ハ百
 基業をひらけり。又諸葛孔明ハ卧竜崗をめる隠女
 蜀の玄德公ふつと廿七歳ハ柴の扉をおひらき。魏
 強兵を破り漢中巴蜀の大敵をくだき。一代の間ハ終ハ
 の事を聞む。大公望孔明ハ葦一國一城の主ハて數度の戦場
 をふたりとりし事もあく。最初より軍師ハ拜せし大
 敵をとりひし。味方十分の勝軍とあり。是上ハ
 致を取あり。兵者を遣ふの道ハ閑居のいかりハ在るハ心
 小練口リ論トて其真妙をよく極めざる者也。戦場ハ出で

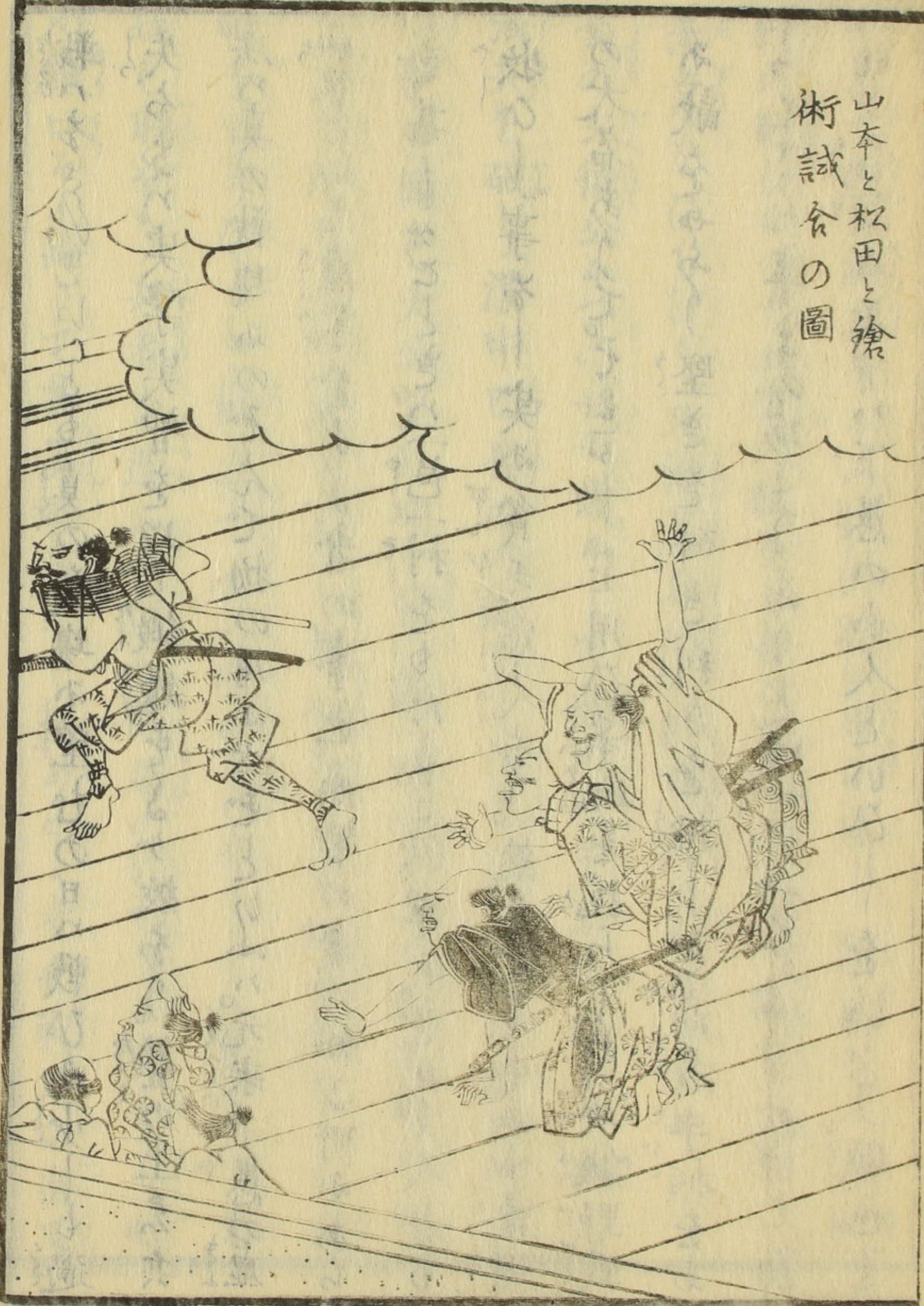
戦ハをさびといへども。真の戦場ハ望むの日の戦ひハ少くも過
 失あり。実學実智を以て鍛錬するハ故あり。疊の上ハ兵
 法ハ真の戦場ハのむんで物の用ハ立むとりハ。元来ハ下愚の虚
 智を以て。虚學をよむ者ハ事也。無智の者の知る所ハあら
 む。某ハかこときハ。一邑一村をもちたり。軍兵を五十人とも
 牧ハ事ハ一実ハ貧乏人あり。然もども今ハも豪傑
 の大名ありて。そまがハを用ハ采配を執らハめハ攻城野戦
 小敵をやり堅きを碎き利きを挫き。高名手柄をあ
 らハ事ハ。唯一言ハ答へける。松田ハ勤
 助ハ答話ハ足下ハ下愚の小人といひハをいり。顔色を

三才心術三卷下

九



山本と松田と槍
術試合の圖



わく河くとうち笑ひ。足下天下をうけまわらう。そきガ―とそ
 采配さいはいをとりふ妙めうを得たり。軍師ぐんしとあらんと。日夜じつげ叫びあ
 るくとも。誰たれあつて初めあり。采配さいはいを任せ軍師ぐんしとあはべき
 や。異國いこくの知む。我朝わがあつて其様そのさまふあらぐ。―く人を用
 ひむ。足下何れどの大智だいちを具―あふとも。誰たれ初めよりよ
 い後のちあふさんや。たとい當家とうけあ召抱めいぶへらるゝとも先初め
 二十貫にじゅうくわん四十貫しじゅうくわんの禄ろくを賜たまはう。鎗やり一本いっぽんの主しゆとあり。戦場せんじやう―
 出て一番鎗いっぱんやりの功名こうめいをあらう。敵首てきしゆの七ツななハツも取。戦
 ひの手ぶりよろしき時とき。足輕あしかろの五十人も預けらる。その
 指譚さしだん法ほうり叶ふ時とき。士大將しだいじやうともあり。士しの三百人も預けら

を。其上一方の大敵たいてきをも中ちゆうあつり目覺めがま―き功こうをあらう。軍略ぐんりやく
 実じつ秀しゆでたる時とき。軍師ぐんしともあ―て一國いこくの士しの上うへあ
 ぶ。又主君しゆきんの陣代ぢんたいともあぶ。敵國てきこく誅伐しゆたつの大將だいじやうともあ
 ぶ。何なにを功こうもあ―もさるきもあき人を軍師ぐんしとあ
 ぶ。さき國くにあらんや。然しかる時とき。足下あしもととら―ども先鎗せんやり一本
 の主しゆとあり。夫おつより次第しだいあ進すすこむ。兵へいがあひが―。某
 今いま貴客きかくのめさちを見みる。一身いっしん不具ふぐの廢人はいじん諸士しよしと同
 しく鎗やりを取と。太刀たちを提ひきけて戦いくさひふ。のそとあつ。忽たちち敵
 の為ためあ首くびを取とらる。軍師ぐんしとある事こと。叔しやくあき一人前ひとりまへのそ
 らきも出来できが―。孺脚にょくの支離しり者もの何れどの智惠ちゑあつこ

も。齒ふわくるふたうむと居丈高ふあひて罵あうけをた。
 勘助あけくふ蒼へらる。元そ采配を握り軍師職とあ教
 者。先下ふあひて兵糧を炊く人歩の業より上ふいら
 てハ大将の行ふいたる。迄悉くあうむとりふ事あし。いそ
 んや武士一人前の業をおとほして。口をひらうぶ是狂人の
 所為と申を者あり。何をおぼへあて。口をむらうしや
 とりふ。松田かいそく。今の世ふ武士一人前の業とりふ。鎗術
 あり。其故ハ戦場の勝口ふハ一番鎗二番鎗とりふ事あり。も
 しうりの試合あもせよ。のまふ所虚言あくハ某ハ鎗
 先ふ立て比技あまへ。勘ふかいそく。いそあへて比技を好

まむ。元そ人の情こして勝時ハあろこび負る時ハいきど厚
 る事。古今ふ通例也。某ハ壮年の時。眼流とりふけんあを
 つを好し。又鎗術を鍛錬ハ諸國を徘徊して修行ま
 内。比技ハ打負くハ日ハ別条あく安穩あり。又勝を得
 時ハ。いきどわりをふくま色。深更ふ及ひ待伏ふあひ
 殺とまんとまることたびく也。又ハ大勢黨を結び理
 不尽ふ打果さんとまると危難ふ合ふ事数をあうむ。其
 たび毎ふ。きんを蒙り手足を折き眼目を失ふあひ。あ
 のどくある支離とある。いそハ生き付のあく。いふあ
 らむ。志あひをさる。度毎ふ意恨をふくま色。きんをつ

らえて今の奇特のよい人とあり。勝負事比校事の出来
か。其勝を得たるはそまがうが人ををとりて勝た
るあらば皆かまが手練の未熟ありおこまがり。唯今とて
も同一事也。そまがう今日足下と比較をますること
需めて仕る事ふあらず。且下勘助がり所。口と行ひを
ひとしきやいやを試さんとの事ありといへども自
然某一僥倖ふして勝を得たる時ハ足下の修行未熟
ふして其料某が預る所ふあらば。後日ふ怨をふくむ
まどき公平の心あらむ。勝負ふ自てたがひふ恨をふく
むまどきといふ。誓約をうそ免。木刀を以てころ見るを

一。着いきどなりをふくむ心あらず。某一が只今の過言
をあるして歸しむ。藝術をうり物とし。禄を求めん
が為ふ徘徊するりのふあらず。むとまら。立起たる君子ふ
逢て自己の修行をおさん為あり。此道理をよく察し玉
へと申ける。一座の内ふも其高論あるを感。比校を止む
るもあり。又ハ勘助が今の一言穩當ふして。比校を辞し。此
場を遁きんとまを心得たる者ハ。ひらふ一試合しむへと
まむむる者も多りける。元来松田ハ自己の藝術めたるふ
り人を人ともせざりし。止まるる氣色もあ。勘助ふ
向ひ申しけるハ。某一決して後怨をいふま。又あ

勝がちのいきどわりを以て試合をまゐるめ何らば。貴客の武
 勝をたゞふ於てい。至君相摸守へ吹擧致し君の為小足
 をそむむる心術也と強て止ざるふより勘助も。然らむ
 りよて身をととのへ比技の用意をあしふける。此時松
 田門弟子も引方といふ。諺ふひとしく。むとまらう松田
 小勝をもらせんと。神水をのんで視ひ居る。門人鎗を取
 て双方ふあさへけむ。勘助其鎗を見る。柄の長さ二間を
 くり。先ふ麻の皮の牡丹を付たり。勘助は左の手指二本の
 こ。されども母指のあひたふやりの柄をささむ。けいと野の
 中央より進し出元来小兵の上。一身不具の人物。勝べきやうに

を見へざりける。松田へ身の長六尺をあり。年齢四十ある人、
 めして。勘助とくうぶまを。後いあらば。さるうふまをさま
 く見えふける。互ひみ辞義を致し。まをふやり頭を進め近
 付とひとしく。雷光いあづまのごとく。早業を交へ突む。ば
 何をも屈伸自在の妙手。些し透間あらばこそ。互角
 のあるまひ。負むおとらば。戦ひける。此時志あひをま
 めたる。門人の手ふ汗をぬぎ。止たる。門人らへ勘助が
 鎗術凡夫のしごふ何らざるを見てよし。あき比技をり
 めたる。りのめあし。片濤をのんであがめ居る。勘助が鎗術
 たる。めふこへ身をひるがへ。突入と見へたる時。松田へ面て

をつらきて。屍居おどりと倒れたり。一座の門人此有様お
 ころき声をのんで一言も出さ者なく。しづも顔を見
 合せて居る。其後三度追試合を致せし。手段少
 もおろし。鎗法拔群お勝をとり。松田の勘助が不具り
 して練磨の功卓絶あるをくんど。大いおごんぎを致し。諸
 門人と共お勘助を上座めして。誠お唯今の御手練某が
 輩の及ぶべきおありむ。この年頃鎗術者と云者お出合致
 度其藝を心見るといへ共。今日の如く目をかどろくた
 る事あり。此一術を以て余の妙技をも推察仕るお堪と
 り。我家お数日逗留し。主君お吹擧致し。當家へ取

持仕らんと申しけむを。勘助の松田が疑念をもちひ。腹中
 お物あきをよろこび。かくて十日をくりも渠が家お止ま
 りけり。
 人を殺したく其恨で殺さむ。此方おあごを
 たぬ。憎いとけふハ尤あ共。己まが無器用未熟お人
 お負あがら勝たる人を恨む憎む是ハ大ひある無理
 あり共。ありある事也。己まが未熟でもけたら勝
 人を師匠として習へをいぬ。そふいせにして。恨と憎と
 て間打おせんとする。誠お油断ありがごとし。人を
 人おひいでると存トらるに人お憎まむることあり。

高木ハ風ハ吹折ラセ。出た。枕ハ頭ラをうとするの道理
あり。用心まべ。是ハ兵法劔術勝負事むろりハあら。存
存トの念出世を致し。身上をよくすると。是を憎む。そ
祿む人あり。狂哥ハ○中のよい隣りも今ハそりけ
る此項藏を立てり。後ハ貧のくせ恩ある人をと
ま。つ不沙汰のそりやわげどをいふト。誹りを受恨しを
受る。誓ハあけ共受る事あり。況や勝負変色欲の
恨と探ハ又ハ一際深くして思ひよりぬ災難ハあふ
事あり。急度用心まべ。

松田七郎左衛門ハ志きりハ大守氏康ハ吹拳志け。然

らハ勘助ハ對面せん。と城中へ召せける。山本勘助ハ松田ハ
隨ガハ登城り。一座の為体を見る。先上段ハ
相摸守氏康の座をまうけ。いま出座ハわつた。左右ハ
ハ松田尾張守。大道寺玄蕃。其外の諸士ぎげんとして著
坐。其体甚ハ嚴重也。諸士勘助ハ一眼ちんをあるを
見て。互ハ目と目を見合せ。笑ハ居る。志きりハ有て氏
康上段ハ立出。勘助ハ對面ある。其体尤おびまう
勘助平伏して拜。仰りて側を見る。翠簾をかけた
一間あり。其内より異香ふんく。鼻をうか
む。也。此所ハ救百の女。今日勘助ハ氏康を拜むるを

今川義元の城門の圖



山本勘助

庵原安房守



見んと。みまのひまきとちゆ几帳きとちゆのうげより。のどき何とあくひ
 そめきまや叫まやく体。あままびままき事まうまぎりまあし。勘助拜顔
 終りて座を立んとまゐる。一身不具ある上。ちんまをまあまは
 居ま飛まがまごまごま。氏康志のびまがまごまごまやありけんま嘔まへまとま笑
 ひまあまへまをま。最前まよりま声まをまのまんでまらまへまたる。近習ま六七ま笑
 ひま袋まの緒まをまきまらまし。声まを出ましてま笑まふまむ。嚴重まの座ま一
 たる諸士同音ま小笑まへまをま。一間まの内まふまあまみま居まる。女房共まさ
 飛まさまごま小笑まふまをま女まの常まあまままをま。ままままをま忘まままてま笑まふま声
 雷まのちまのあまるまふまとあまらまむ。流石ま容形まの。ままままくまきまをまたまづ
 る事まあまきま勘助まも。赤面ましてまぞ退まきまりまる。氏康左右まと見

あへりて。扱ま見まにまくまきま者まもあまままをまあまるま者まあり。七郎左
 衛門まあまきまりま小推攀ませましまありて。對面まのいまらまたれど
 も。是まはまどの不男まとま思まをまざまりまき。彼またまとま何まもま多ま能
 ありといへども。あまままてまいまの人物ま何まもまの事まうまあらまん。當家人
 小事まをまうまきたまることま。四体ま具足ませまざるまのまをま抱まへま。何
 の益まうまあらまんとのあまふま。松田大道寺まも勘助まが不具まある
 を見まて。敢まてまあまらまことまをま。七郎左衛門まの松田尾張守ま大道寺
 支蕃まふまつまいて。さまあまぐまふまさとまをまこまいまへまども。あまらまてま執持ま
 人まあまらましまふまより。是非まあまくま城中まをま下まりま。勘ま介まふま向まひ
 此まよましまをまあまらましまりまけまらま。勘助ま莞尔まとましてま申ましまけるまハ。

のどくあるを見む。号令嚴重あらざる時。其国極危て
危き事あり。當家の如きハ東國一二の大家也。諸士の多き
と星のごとく。威令を以て諸士を治めむ。大國をた
もちがさし。今日の為体くたると。勘助がふるまひ見ぐる
しく。さて。笑ふ小忍びがごとくとも。大将の座前。恐きあり
と思は。何条笑ふことのあるべきや。ひつぎさう大将を
大将とせざるふより。て。おのづから笑ひも出るものあり。又
かこころの一間見るふ。多くの侍女もその内ふあつて。色
を見物せり。是又女色を車んトあふかいたも所あり。色

をこのと威權をみどるハ亡國の端あり。足下何やど勧め
ふとも。御用ひあり。それも又爰ふとある心ありと
り。叔勘助ハ其翌日。旅行の用意をあり。小田原を打
立んとするふ。松田ハ此やどより。勘助が実智實学ある
小伏。憚るとして。別るふ忍びむ。止むるといふとも。何
て止まる氣しきあり。勘助ハ此はどより。松田がぬんぎ
んあるを謝し。小田原をいで。夫より。鎌倉ふあひむき扇
谷の上杉修理大夫憲政の方あり。爰止まること。數
月。そもより。又上州ハ趣き。倉ヶ野越中守が家中止まる事
三月をり。爰ハ二月あり。こハ半年と。諸州をめぐり。天文

十二年の冬十二月駿河の國に越今川義元の城下におもむ
 きける。爰に今川の長臣に庵原安房守といふ者あり。智
 勇武略人ふとへ。又人を見る事ハ。漢の蕭何が明ありて。あま
 孫く名士を吹攀せると聞えしを。うきか人物其大機
 を心見んと。頓て庵原が家にお至り。名札を出して。對面せ
 ん事を願へむ。安房守も勘助が高名を軍事又し。早速
 出迎ひて對面し。其人物を見るに醜き事あざりあく。又
 小男あり安房守曾て人物のよきを嫌をば。あくる不
 具ある身として。其名諸方にお聞ゆるりの尋常の人におま
 らばと。推察致し。數日我家におあめあき兵たのびと。論

むるに。中々安房守が及ぶ所あらず。扱ハ此人の高名天
 下にお香むし。きもことありあるう形。いりあもして此人を
 義元公にお吹攀せんことを思ひける。庵原ハ勘助を久しく
 留め置て胸中の大智を深くうかふ。孫兵が兵道の
 玄機を以て。已むかみのとあり。當時諸家の軍法をい
 ふ者と。日を同むりして語るべからば。安房守深く感伏
 し。天晴かゝる豪傑の訪ひ来る事。當家の幸ひあり。主
 んにおまゝめて高禄をあへ。當家にお止めんりのをと。頓て義
 元におまゝめていたく。山本勘助といふ者其産ハ三ツの人。諸
 國武者修行をして。普く東西を巡り。適く爰にお来り。

某がーが家あり。徐く愚意を以てこれ胸中此文機
をさぐり伺ふ軍法武藝ニツあがら拔群の者あり。あ
當世軍術を以て世上の鳴者の能及ぶ所ありむ。いふ
てもあげ用ひあべ。當家を富を謀計ひひいと申し上
りをも。義元悦喜斜ありむ。吾勘助が名をきくこと尤
も又。速く伴ひ来るとありりをも。天文十三年正月勘
助を誘引して立出る。義元の左右あり。朝比奈右兵衛尉部
三浦の如き。一班老臣其外謀士謁者巍として列座甚た
嚴重あり。群衆の諸士ひとく。眼をあけて勘助が出る
をうかがふ小漢子ありて相貌よく。左の足遙か

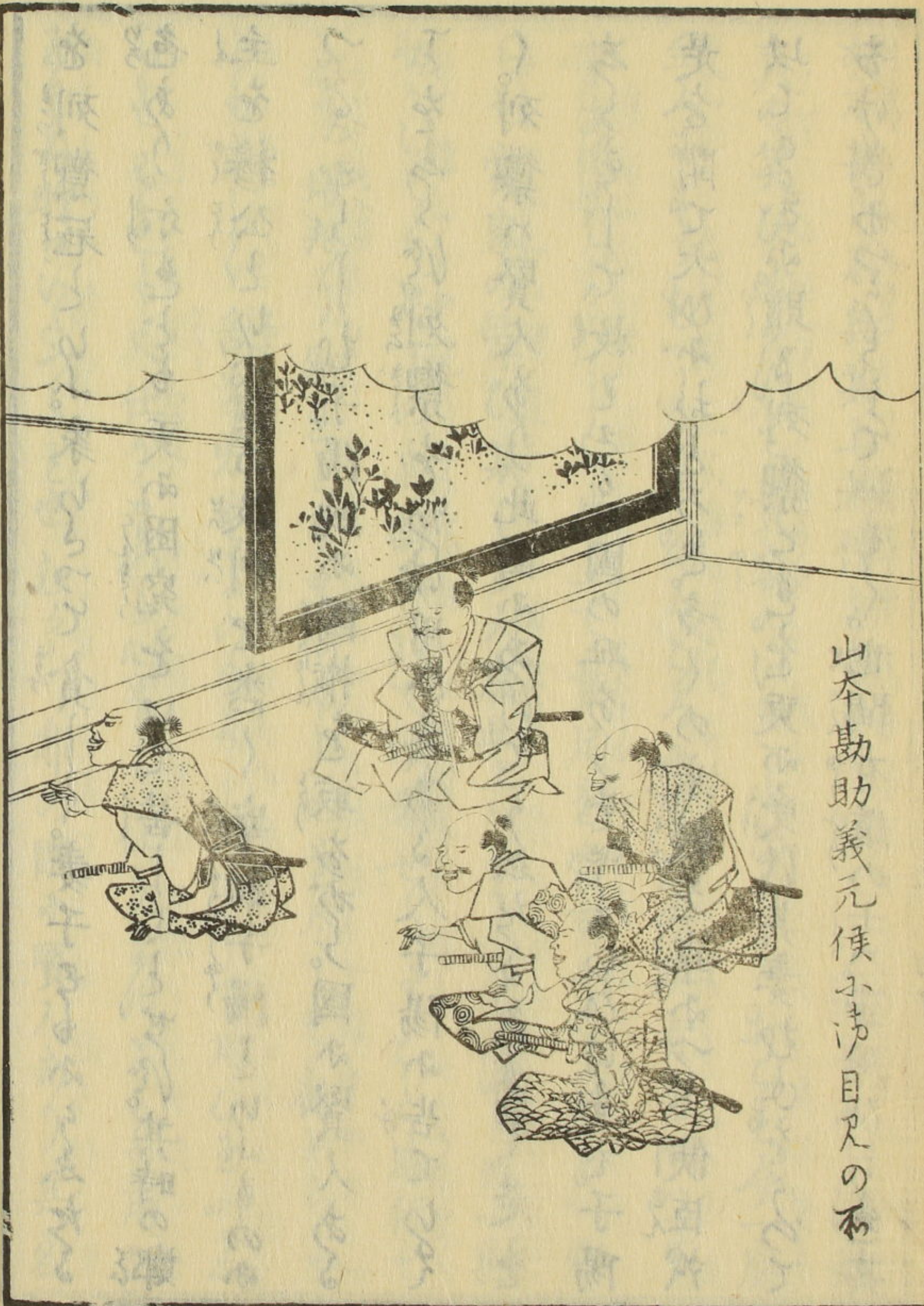
と。か。座前歩こ来る模様行歩飛ぶかごとく又的確
をふむかど。一座の若侍ひこの有状を見て笑いを忍びん
とまると堪ごと。末座ありたる少年五六人忽ち笑ひ
出まふ其あともう並居る者も堪う糸て笑ひ出せば異
口同音ハハとさけびりむ。義元も近臣の忍びうひたる色
の可笑さ思ふに笑ひ催さる安房守群臣のつりま
るを以て心小悦びも。苦くき顔色も。御前小向ひ諸
く修行の名士。山本勘助御目見へ仕ると申まふ。義元謁
者近もあく勘助を近く召せ。高名の壮士去年以来安房
守家小容居せりと。武術といひ軍略といひ等倫の

たくひふありざるありを聞傳へたり。願くハ即今座前そくこんり
 於て。武術の玄妙かんめうをあらざるをべし。當國の士不器用ふきりゆうはし
 て。武術ぶじゆつの突出ぬきんてたる人希まれあり。尔しもども一兩輩いちりゆうはい普通のも
 の有り。先まづ劍鎗けんそうの二枝ふたえだを試こさんと有ありきむ。勘助かんすけ率然そつぜん也
 して答へらるハ。僕わがも不具ふぐの廢人まいじん千せんの一いちも取所とあり。試合しあひの
 義ぎハ御免ごめん下さるべしとりのみ。是ハ一座の人々いちざのひとを始めはじめ義元ぎげんの
 高かう声こゑハ突つひあちどりをづらしめぬを以て。上かみハ嚴重げんじゆう此
 威いあく下しもハ重禮ぢゆうらいの法はふあり。國家こくがハ又またハありむべし亡なぶべ
 きと悟さとりし故ゆゑハ少すくしも謙讓けんじやうの禮らいをあらむ。某たれハ平生へいせい字
 ぶ所ところハ乱らんをまづめ國を安んぶる所ところの軍法ぐんぽう軍略ぐんりやくあり。若采わくさい

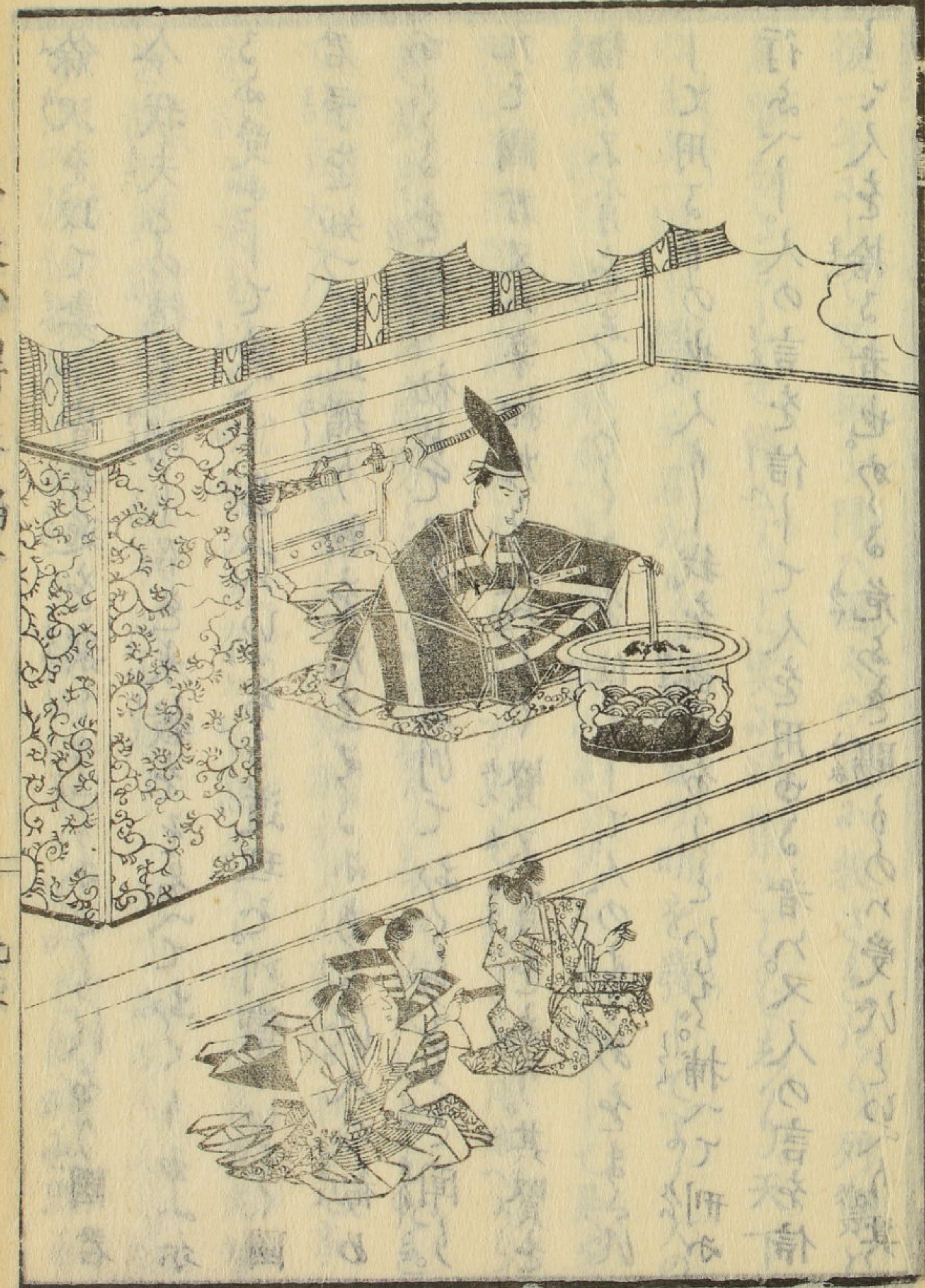
配はいをふりて智策ちさくをめぐらし時ハ戦いくさを以て敵てきを伏かし。戦
 ふといふも寡くわを以て衆しゆうを敗まり。野戦やせん攻城こうじやうハ是元帥たいていしゆうの任めん
 たるつとめを専せんらとし。あて匹夫ひつぷの術じゆつを好このむ。たとへ劍けんを
 とづさへ。鎗そうをとり。千軍万馬せんぐんばんばの中なかハ縦横じゆうけいして終日しゆうじつ手てをくた
 きて戦ふとも。且またハ三級さんきゆうハ五級ごきゆうの首くびを取とり。夫つまを高名たかと
 まるハ平士へいしの所業しよごうあり。此故ゆゑハ少子せうし劍術けんじゆつ鎗術そうじゆつあどの小枝せうしハ
 不ふ調練てうれんふはととる所ところあり。申まをしけむ。義元ぎげん候ごうハ山本やまもとの
 男おとこつぎとめくき上かみ不敬ふけいの答話こたへふりきどなりをふく。ぬ
 たびとづ縁ゆかりのことあり。座ざを立て入いる。勘助かんすけ安房あふ
 守まもりありをきぬ。其後そのち安房あふ守まもり勘助かんすけハ向むかひ。今日けふ城中じやうちゆうハ

始末甚と不與其上若侍ども曾て慎みの道をあらはれ。高
 声の笑ひふよ例て。貴客のいきどわりをおこも。今一應
 主人ふまむむべし。若新んごろか軍法の奥旨を問はる
 事あらむ。よろしく申上て貴足を當所ふとめぬ。然
 らも當家の幸ひ。某一が大慶此上にあるべうらにたり。勤
 助がいそぐ足下の忠誠を以て吹攀せらるる。と感称せ
 る。不堪たり。然れども。又何れと心を尽して勧めらる
 る。空しく舌を労まざるのめめて。決して用ひぬか
 らざらむ。とをも又仕うまつる心あり。仕うまつるも用ひ
 る。ぬ時はいづらうど也。むう。鄭の國か賢人あり其名

を列禦冠とりの。家らつて貪り。妻子もふらぬたる
 色あり。尔れども更み困窮を以て苦しとせは。其時の鄭
 主を穆公とりの。國の政刑を悉く宰相子陽とりの。の
 つとむらむ。子陽既み國権を取あがら。國か賢人ある
 とをあらは。列禦をけけ用ひむ。ある人子陽み告てしえ
 く。列禦ハ賢人あり。此國かあ例てりぬたる色あり。是を
 あらむして救むらハ國の耻あらむやといひけむ。子陽
 是を聞て大ひふおどろき。多くの米穀を車おつて使臣
 以てこそお贈る列禦とをも更み受は。其妻むひをうつて
 あげきあつらうていそぐ。世間有道の士ハ。皆用ひらる其



山本勘助義元侯小清目尺の石



餘沢を以て妻子皆安逸を樂たのむべし。今我夫との徳を聞きて召よせ米穀をそへておくり申まふ。尔の受うむべし。て之の一いつの道みち理りを。列禦りやくごがいをく國くに君きみ予よを知しつて此こ贈くわり物ものをたまたまははるべし。人ひとの勸すすめめを以もつて。初はめては之の志こころを志こころしてはおおくくららるるべしと聞きり。凡たゞそ國君又ハ宰相たる人ハ。賢けん不肖ふせうをあり。其賢けんを勸すすめ不肖ふせうをあり。之のを任まかしまして。人ひとの志こころめをままははるべし。て用もちるべしの也なり。人ひとりり我われを盗ぬす人ひとありといいふべし。捕とらへて刑か行かふべし。人ひとの言ことを信しんじて人ひとを用もちゆる者ものハ。又人ひとの言ことを信しんじて人ひとを捨する者もの也なり。ある危あやふき賜たまひの受うけといへり。其

後一年より宰相子陽ハ國人の為ために殺ころさはるべし。列禦りやくごハ魚事いさなごころあることを得えたりと。実まことに列禦りやくごがいを志こころして。天下てんかの主ちゆう上じやう一國半國の主君たり共とも。自みづか智ちの明あきを護まもりて。人ひとの能あたりりを察さつし。用もちべしき者ものハ。人ひとの志こころめを待まちて。是こゝろを用もちひ。其用もちひてありき人ひとハ。千人万人もむとも用もちべしららむ。是こゝろを戰國せんこくの急務きふとす。所ところあり。今四海大いふ。諸侯しよこたがひに隣國りんこくをううかかひ。其虚きよをううんんがが併吞へいどんせん事を計はかる。是こゝろを以もつて明智めいの大名たなめいハ皆高名たかめいの士しを求め。其大智たいちを試こころみ。其能あたりりを多おほくくび。家風かふうを起たして天下てんかみあらんと欲ほするの折柄せつがらあるを。猶なほ以もつて賢士けんしハああくくて叶かなはぬ時也ときなり。既すで

當國の如きハ。駿遠参。三國の大守より。一々明智をふるひ。天下の賢士をつのり用ひたり。四海をたおごるふせん。ことたやまあるべし。然るふ大守の明を以て賢不肖。能をふるふことあるべし。足下何やと進めらるるとも用ひあり。又天地をひるべし。天下を一つまとい取所の手段あり共。其君たる人信用せざる時ハ。其能をほとこと事あり。やどこと事あり。在て益あり。徒どとあり。夫刀鎗弓馬の武術ハ。士卒の事也。采配をあり。万軍をたおごるふまも。軍法ハ主將の手段也。武の家小生より者ハ小兒といへども是をふる。いもんや大國の

君としてハ能あるむんバあるべし。漢土ハ蜀の前主三顧して諸葛孔明を得む。文王ハ聖人ありといへども。二たび太公望を磻溪ふ訪らひむ。是則ち太公望孔明ハ。戦略軍法ある故也。今大守の某ガ一を召る事也。足下のもめむ所也。某ハいさか軍略をふる故あり。兵法の玄機をもさぐるむ。治國平天下の事も論む。唯刀鎗の小技を以て試んとむ。本を捨て末を取といふ者也。又座中の為体ハ嚴重あり。其上勸助を四体不具のわし者。動作皆無骨あり。一座の侍臣某ガ一が行歩するを見て。声を發して笑ひ。大守もひとし。

く笑ひ者と志す。更ふ豪傑の士を愛するの道あり。賢士を用ゆるの君主の愛妾を殺して賢士を用ゆるとも聞けり。昔一戦國の時。趙國の平原君趙勝といふ人あり。天下の賢士をあつむ。とよみよつて至る者數千人ふ及べり。あるとき一人の嬖たる賢士来りて趙勝が家へ客入り。河内より水をくむ。そのさぬい可^ち笑氣あり。此日平原君が愛妾楼上に在りて。賢士の水を汲あり。さぬを見て。あつむの侍女と共み声をそらへて笑ひける。其翌日嬖へたる人。平原君まゝていさく。これきく君の賢士を貴び妾をいやしめよとを聞き。此故ふ

賢士皆千里を遠くとせむ。て爰ふ来り。吾不幸あり。疾ひ故ふ足あへとある。然るも昨日たまく水を汲むを見て。君が後宮の女共をもを笑ひ者とせり。願くは臣を笑へる女を捕へて首を斬むといふ。平原君是を切らんとむ。りいつて。終ふ其妾を殺さば。凡そ半年あまりありて賢者日く退き去て。止まる者もつらあり。平原君怪しく思ひある人ふ問ていさく。我家の賢者日く引去はく。の故あるをや。かの人とていさく。君さきふ足あへたる人を笑ひたる。義人を殺しむをざるふよつて色を愛し賢を賤しむといふ。平原君是を

さとりて笑える所の妾が首を斬りし所より足あへる人の
門ふりつて罪を謝し此事四方に聞へ平原君の愛妾を
切つて賢士を貴ぶと。後又来る者救千人に及べり。是れよ
つて趙の国天下に威を震ひ名を千歳にのこせり。さよ賢を
愛する人の我氣に入たる美人を切て。猶賢士を志しむ。今
大守がうけつの賢士を求めむ。是を急度尊敬を乞へ
若賢士をわらんむる者あは厳科に處せらる。是れ
也。又そをわどふあはくとも近士を一兩輩あはる。あはれ
けむ。誰う法度を背くりのあはらんや。平生の号令厳
あらざる故。他國の客に對して礼を乞ふる。あはる有状

めて合戦のとき小のむ。威令何を行あさるべき。勘助
今足下を對し。大守の法令紀律をきことを述べし罪を
死すあはるといへども。此程より深くせんを蒙る
故。もわをわへり見む。申しありと。道理あはる
て申しける。庵原安房守も勘助に説付らる。足下は
言一我が心肝を鐵砲を以て刺がどしとわへり
智者の遠見むある。十六年後鳴海合戦の時義
元の軍勢勝りしは。敢て主將の号令を用ひま
んで織田勢を追うけ。旗本大い空虚せり。信長これ
を察し。後ろの山間より。急ぎ迫り不意を討て大

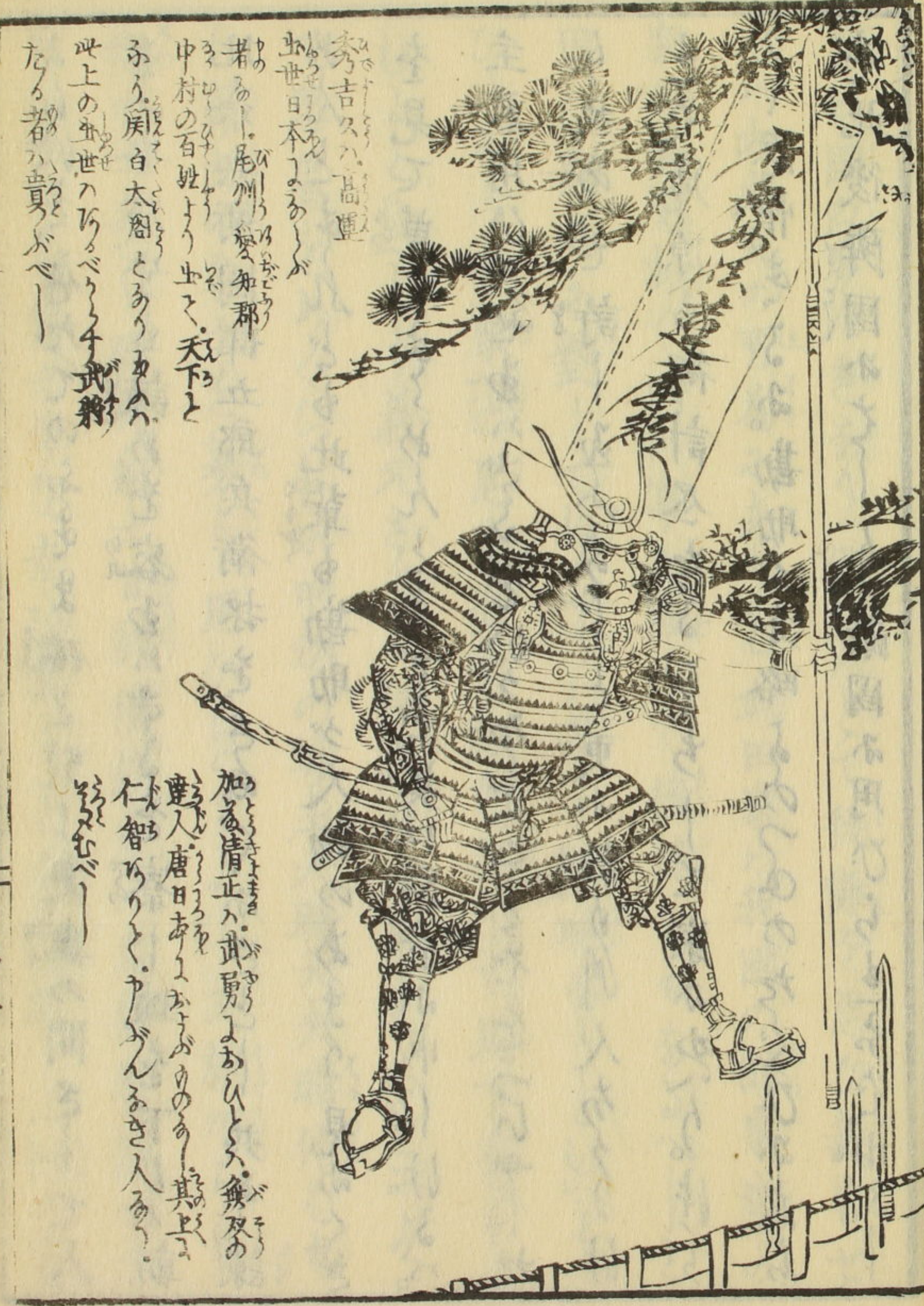
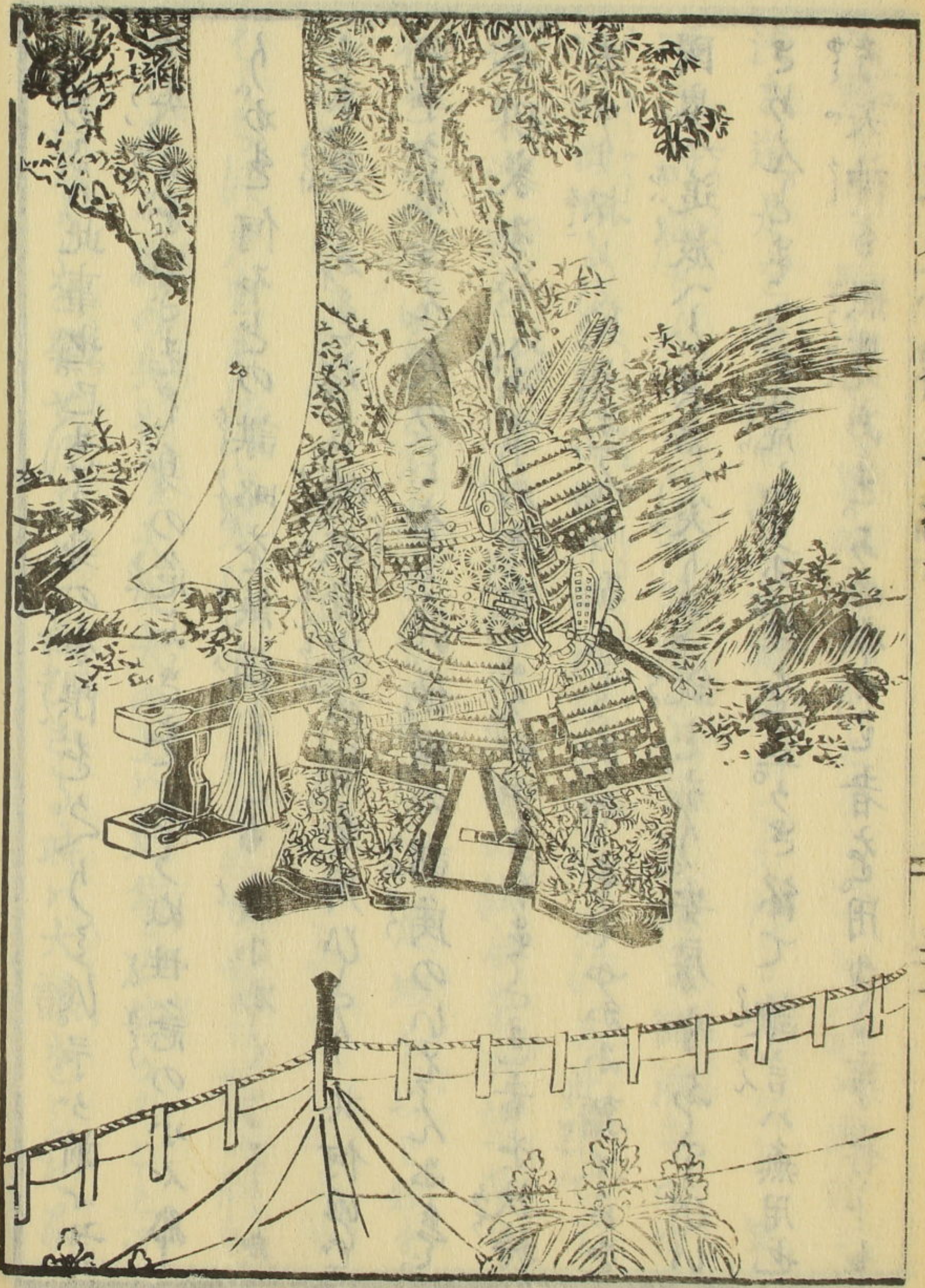
いふかつ義元桶狭間たけがらの討死うつけしたまひし。法令がん嚴げんあら
ぶ。致いたすところありといえり

庵原安房守を何とぞ勘助を止め用んと思ひ。再び義
元の座前ざぜんへ立出たせむ。義元憤激いんげきの色いろ面上じやうめいふあはれむ。い
くふ安房守汝あんが勘助が能うをあげ武術軍略ぶじゆんりやくニツあがら
人ひとふ卓絶たつてつとりと讃やむふより對面たいめんしてとる見る所。
其不敬ふけいの狂漢きやうかん世よのまこときりのとりべし。安房守謹つし
んで勘助が申ませしことども逐おふべし。且かつ又また万率ばんそつを得安やすく
一將いつしやうの求めがごとし。又あはれくの大將たいしやうの求め易やすし。がうけら
の賢將けんしやうのありとむる事あはれ。勘助がごとき者ものも。智略ちりやく

藝術万人ぎゆつばんにんの勝かちも。當時たうじ天下てんかの奇き尤ま也なり。たぬく我國わがくにのめぐ
り来きるを用もちひむとべし。て他國たがくにの用もちひらむを。後悔こうかい恥ちを
かむとも及びおよびがごとし。何とぞ御用ごもちひあつて當家たうけの繁榮はんじやうを
起おこしむべしと申し上げむを。義元頭ぎげんかぶをふりて勘助かんとが
ま汝なんがをせめたる事こと。短たんを以もて短たんをせむるといふべし。今
日けふも對たいし。武術ぶじゆつを試合しあひせよとのをこしん。たとひ予よが
りよ所道理しよだうりの中なから出いで共とも。過言かごん即答しやくたうふ及びおよび。たとひよか
らん。予よが耻辱ちしゆを所ところへしたる。あはれか大量たいりやうあきみあはれ
や。凡まづそ人の大おほを試しるふ浅あきよりさぐりて深ふかきふりて
る。是こゝ通義つうぎあり武術ぶじゆつの一人ひとりの勝負しやうぶ匹夫ひつぷの事ことある。更さら

誰もよる所をう。軍略と武術とあはせていふ時。武術も
 浅き道。是を最初試み武術衆ふらえたる時。次軍
 略を討論せん。夫の軍法者といふは是也。臨濟寺の空
 涸和尚のひの葛山備中守のふときをあはれぬ。此者らと
 得失浅深を計らんと思ひ。先武藝の試合を所望せん。
 彼を思の外いきどかりをいごきたるは是短を以て短を
 せむるふあはれや。又其人と為らぬくきふより。近士等
 もうら声をあけて笑ひしをりてめてあはれたるあは
 あらむ不慮の失あり。大丈夫の上は是等の此うのことか
 いきどかりを發せぬ。小を忍びざる時。大謀をこたふ

とあるは此事也。己が身の分限をうりて。予が前不
 て失言をいごも身の危ふきをあらぬ性急の小人邪
 り。かは何やどの謀略を兼備もとも齒あかくる。た
 らむ。長のあはれたる醜奴身中の智を用ひし。共何は
 の事うあらん。夫のとあらぬ。他國の諸侯のいもんも
 今川家めを人ふ事あきたる。かゆうをまこも者を扶持
 あらぬ。採と笑ひも人も耻あらむや。まもかか孺子めを
 國界へ追放へと其声尖りて。鋭どあり。安房守あはれびい
 さめんとまも荒らる座を立。うと縁て諫言ハ無用也
 弓矢神も照覧あは。あのかこと者を。用ゆる事存トも



秀吉の高麗
出世日本よあし
者あり尾州愛知郡
中村の百姓より出で天下と
ふる願白太閤とありあは
此上の世にあらるべき武將
たる者ハ貴ドベ

加藤清正ハ武勇よしあしと云無及の
人唐日ありあはるものあり其の上
仁智ありと云あはるべき人あり
貴ドベ

よらばと。危なてのふまを基礎と引く。奥の間さして入
 る。安房守も諫めを容れざるを察し。城を下り朝
 比奈兵衛固部五郎兵衛杯をさぬぐふさと一共り諫
 めんとまれども此輩も勘助が人物のあまり見ぬき
 を見て。曾てまめんともせむ。異口同音申しける。ハ
 主君用ひさせぬざるをいうやどこををついやしけ
 り共。あへて詩一ぬふまどと更ぬ執り人ありけ
 るを。庵原も術計尽たるうちして家おぬへり。はら
 く思惟するふ。勘助が才略ものつひのたぐひふあら
 む此後隣國かこり敵國お用ひらまおた。由り

き我國のあんぎあり。然らばとて後難を思ひ殺害せ
 んハ大丈夫の所為ふあらむ。武田家の我國の縁家也。う
 家お勧めあく時ハ事お臨んで後楯ともあるべしと
 思ひ。勘助お對してしやうハ。某一愚昧ありといへども。
 ひごまう君家への忠を存す。顔色犯して足下をま
 むるといへども。義元さうお信用せしむ。お色ふよ
 て思慮をめぐらむ。甲州の城主大膳大夫晴信を車
 ら奇支の名士を募り用ひらる。又旗下り豪
 傑の士多く。殊更家士甘利備前守ハ忠義智謀あり
 をあへたる勇士あり。幸ひ某一と交り深し。一封の書

を調へ足下をまゝめんと思ふ。是より甲陽へおもむきお
ふまどきやとりよめ。勘助元來晴信と約をあり深く
示し合せしむる旨あつて。うゝ國々を遍歴し。最もや
甲州へおもむくんとおもひ折る。安房守がことをきき。
渡りぬ舟を得たる心地して。悦喜色ああらむを答へ
けるハ晋の豫讓がいをもく士ハ已を志する者の為み死
をといへり。某し貴宅み草鞋をぬいでより。救月の間
ど恩遇を蒙り歡喜一言み尽し。今又書を以て
甲州へまゝめらるる足下の下意を明白みこれを察せ
真み忠臣の所為感心するみたくなり。若晴信朝臣某

し不器を捨ぬむむ。ころざしをわくおけて仕へ。長く
貴士の恩をまゝす。まゝと申す。書を書きめぐる。申
せぬ。庵原も勘助が唯今の一言此方の心中を志するとい
ふ。安堵の思ひをあり。いよくかきか。智凡夫のた
くひふあらはれとおどろき。書を書きまゝめて。しけを
ハ山本も旅行の用意をあり。頓て甲州へおもむきたる。
○今川義元ハ山本勘助を用ひぬ。又其後幸ハ家
來松下嘉兵衛の所み木下藤吉郎あり。是を引上て。く
用ひぬ。天下の主トとあらん事疑ひあり。然るみ其人
を用ゆる事をまゝ。終み其身國家迄滅亡せし。愚

將とりよへド。富士川ぬ於て北条氏康と戦ひの時。木下
藤吉郎松下嘉兵衛の所やうきを救ひ。又北条家より名
高き大将伊東日向守を討取て。北条の軍をやぶり。ハ
是木下が技群の働きあり。手並のほどいふは是なり。是ふよ
ゆゑ今川義元藤吉郎を呼出。大いふやめて手づから
恩賞をもあへ。一組の頭共あそびき苦あるなり。其事をも
あへ。せめて詞のむらびあり共ある。あそびき苦あるふ。夫も
あへ。是ふよゆゑ藤吉郎ありひけるやうい仁智ある大
將あつて某を呼出。恩賞をも行ふべき苦あるなり。
其事もあそびの愚將あるべし。あそびの愚將お仕してハ何の

益うあつんと。今川の旗下を遊て。尾州清須の城主織田
信長公お仕ふ。信長公ハ藤吉郎をよく用ひおひて終り
て天下の権を握りたまふ。是外の事おあらは。藤吉郎ハ
恩賞を興へよく用ひたるにゆゑあり。憚りあがら信
長公をよめ柴田佐久間等の働きを以て。京都の真中
小旗を建。
禁裏を守護し奉る事ハありがごとし。是偏ハ藤吉郎
が働きりゆゑ也。然らむまた臣下ハあそびきりのあり。
万卒ハ得安く一將を得がごとしゆゑハその事あり。木下
かあそびを天下とせり。木下かあけむハ大名めもあそびがごと

一。事ふものたり自家も他家ふせめらるるを滅こふ及ばんも
 ちうりがごとく木下があけまを。信長公も美濃の國江及ふ
 於てもあふき事度くあり。又遠藤喜右衛門より殺さるる
 事あり。亦るふ其あんをのがまふは。木下があふふあり
 てあり。武將たる者へよき臣下あくては叶はざることあり。
 ふ紀臣下の世畧第一の宝あり。智仁勇の三徳ある良臣
 を求むべし。乱世の猶更治世といふとも。大入用の事あり。國
 家を治め万民を撫育するふは智仁勇の三徳ある人より
 何らざるまは。万民を安穩ふ治むることありがたし。斗
 屑の小人何百千人ありとも。大事の用ふは立ぐことあり。又

何ぞ民を治むる事をあらんや。若智仁勇の三徳をこ
 ろへたる人あはば。篤実の智者を用ひて國家を治む
 べし。不忠不義の人を決して用ゆるべし。大いふ國家
 の害とあり。終りの至家を亡むべし。

○今川義元候は駿遠三の大守めりて數万の軍勢あり。
 向ふ所落さむとといふ事あり。小國小勢めて天下を十年
 ふ取らむ。大國大勢の今川は二年三年ふ天下を掌握べし。
 木下を軍師として諸國の大名を攻討む。天下ふ敵あり。
 手ふ立者いあるべし。亦るふ智仁勇ある木下を用
 ひざる故り。取べき天下もとり得む。あまのりといふ藤吉

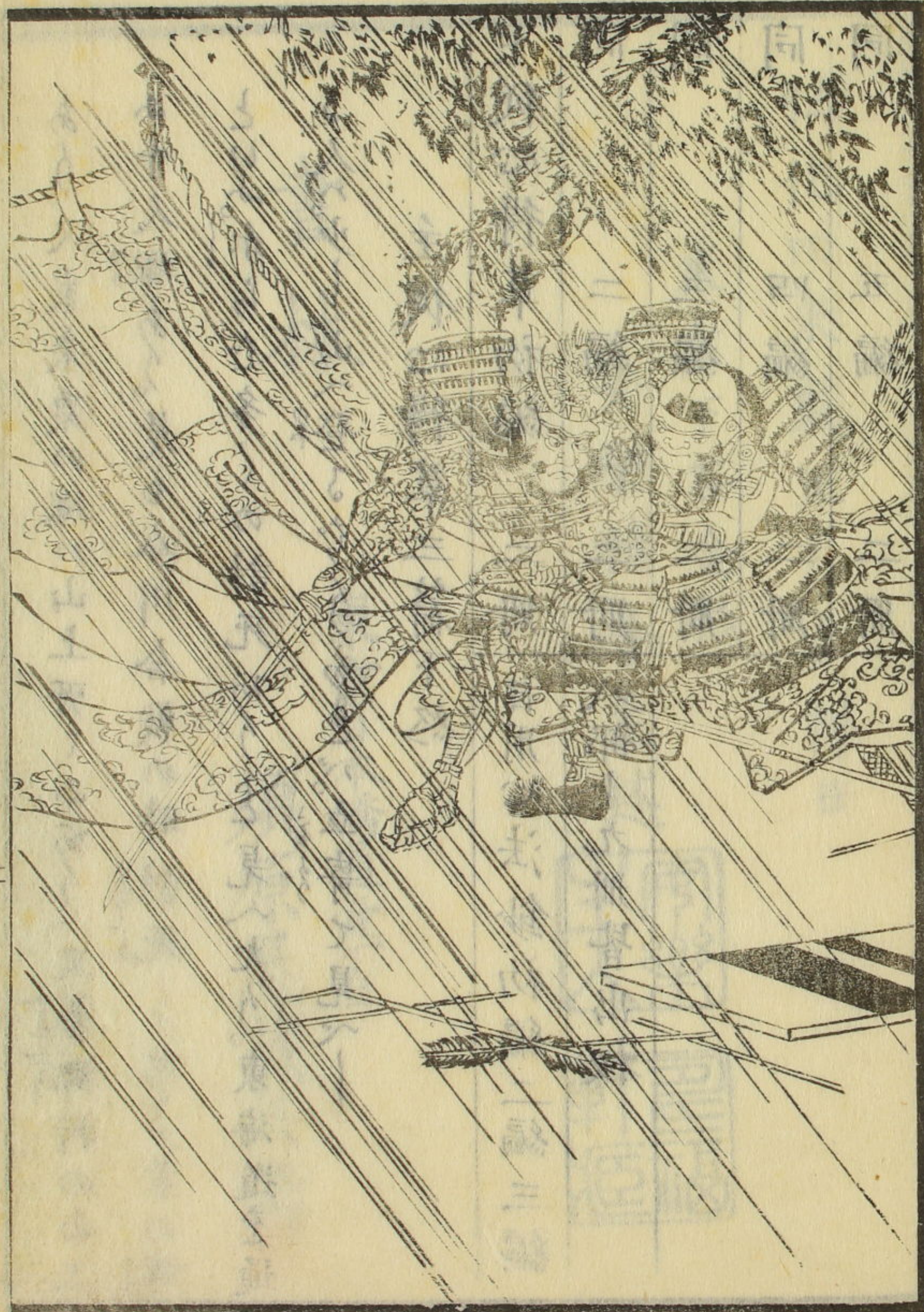
郎の謀計せうけいお落入おちこて。其身そのみハ尾州びしゅう桶狭間おけいあまの土つちとあり。四方五
 千余の軍兵ぐんべいを大方おほほうころせしハ残念ざんねん千万あり。御先祖おんせんぞの
 丹誠たんせいも水みづの泡あわとあり。其時の妻子そのしよ家来けらいけんぞくハ皆路頭みちづち
 了りやう迷まよひ飢死うへい寒死さむいせしありん。是こゝにて人ひとを用もちゆるの大事だいじ
 をよくあるべし。又よき人よきひとを用もちゆるを骨折こつこを苦勞くるわうありしハ
 高枕たうきんおて天下てんかをとり。日本中にっぽんちゆうの最上さいじやう人ひと武士ぶしの長者ちやうぢやとあり。ハ
 大いある出世しゆせありまや。又よき人よきひとを用もちひざる時ときハ。已いままハ愚
 将しやうといふ也。其上そのかみおけりしき首くびを切きる。親子おやこ兄弟けいだい一家いっか一門いっもん家来けらい
 んぞくまで。皆冥途めいとの鬼おにとあり。末世まうせ末代まくだいまで人ひとの笑わらひ
 草くさとあるハ口惜くちやくき次第しだいあり。義元ぎげん候こうも木下きのしたを用もちひあり。

眼前がんぜんハ天下てんかとありん事こと疑うたがひあり。其木下きのしたを用もちひざり
 て。天下てんかを失うしなひ其上そのかみお御先祖おんせんぞの大功たいこうを潰つぶし。已いままハ冥途めいと
 の鬼おにとあるハ不覺ふかく千万此上このかみもある。危あやむし。人ひとを用もちゆる
 事の大事だいじ也。此今川このけがわ氏うぢと木下きのしたとの事ことめてよくあるべし。
 外ほかを勤いそめ見みるお及およむ。是こゝよき現證げんじやう也。是こゝよりよ川がわて
 智仁ちじん勇ゆうの三徳さんとくある人ひとをえりんで。奉用ほうよう也。主君しゆきんたる
 者の職分しやくぶん大事だいじの中の大事だいじあり。堯舜ぎやうしん等の大聖だいせい人ひととよ
 き臣下しんげを心こゝろよりくけて。求めぬ況いはんや其外そのほかの者ものともハ猶
 更さらよき臣下しんげありてを叶かなぬ事こととあるべし。是こゝよりよ川がわ
 てよい臣下しんげを用もちひて一家いっか一門いっもん家来けらいけんぞくハ民百姓たみひやくしやうよりい

たるまで安心し養ふべし是を仁政としふ。盲目ちんを不仁者まごも安穩にくらせるやうしするを仁政としふ。都て世の中ハ俱暮しあまを。あまをいよめ是ハ幸ひせん。片寄べくは。人々分く相応ふくらし。の出来るやうふせべし。入る家業を出精して安心し渡世の出来るやうしするを仁政としふ。此外り仁政としふをあきぬり。万民を安心し渡世させんぬ。あき奉行があくてハ出来ぬ事あり。是ふよつてよい臣下を求むべし。あき人を用ひむして。國家を亡がしたる人の救多あり。前車のつがへるを見て後車のいましめとまべし。是を今川木下カ事とむり

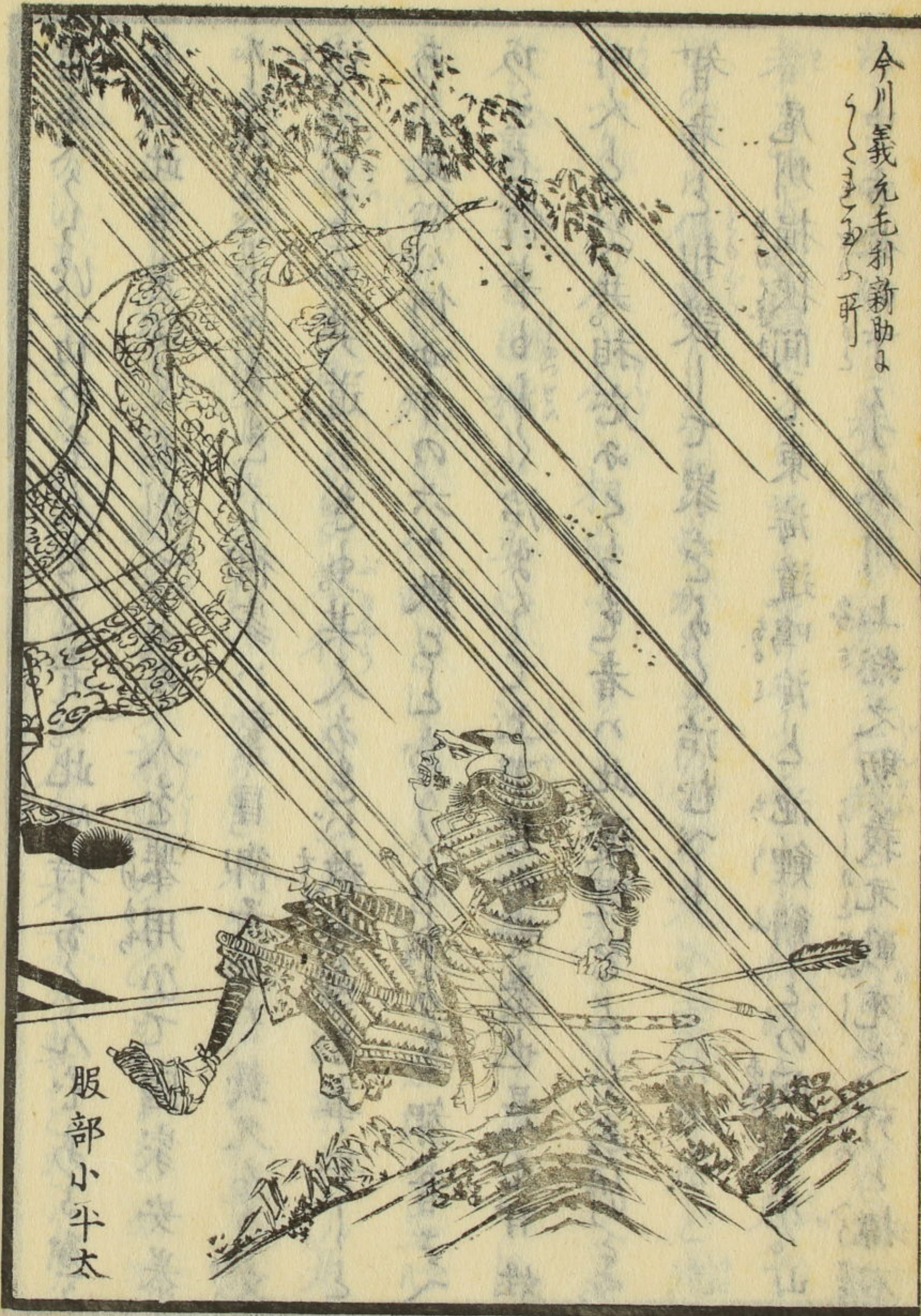
思ふべし。一切の主人たる者ハ。此心得あくんをある。治る。此事をよくあつて。あき人を擧用ひて。國家安泰し治むべし。さまを御家の繁昌御子孫を長久あり。文選ふいむく其道をきも。其人あまハ救ふ。あき事安しとあり。此心ハ何やうの六ヶ敷ことありとも。あき智者さへ何を。何事もよく治まりて上下共ハ安泰也。是を百姓町人とし共。相応ふくらし。者ハ此道理をよくあつて。智者と相談して家をよく治むべし。

尾州桶狭間を東海道鳴海と池鯉鮒との間あり。山中古松の下り今川上総之助義元戦死之所と標石



正徳公討二編下

三二



今川義元毛羽新助
 今川義元毛羽新助

服部小斗太

三徳心行三編下

三六

あり。又家来衆の塚ハ山上所々あり。又善郷村の山上
み千人塚あり。是も今川合戦の時討死したる者の塚
とり。亦らむ多くの討死ありと見へたり。東海道を通
る人ハ少く山へ登るむろりあまきバ立寄て見べし

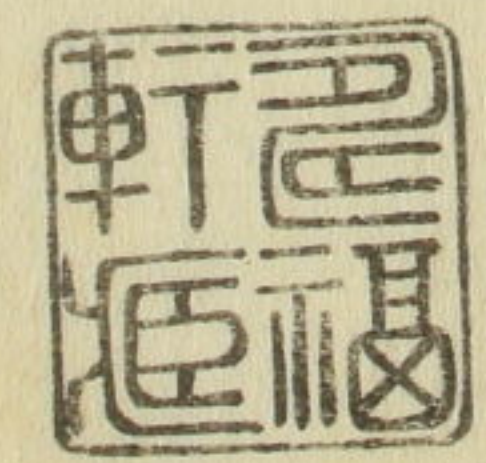
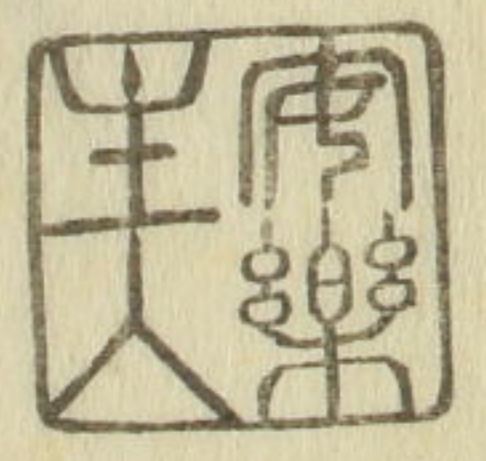
主従心得草三篇下終

同	主従心得草初編	二冊	日用心法鈔初編二編三編
同	二編	二冊	八部十九冊皆出板
同	三編	二冊	
同	四編	二冊	
同	五編	二冊	

弘化四未歳正月吉祥日

東京下谷金杉

安樂精舎主述



書林

東京日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

